薬学メディセンター10年のあゆみ

山田　雅子（やまだ　まさこ）
（薬学メディセンター主任）

薬学メディアセンターは2008年４月の芝共キャンパスの開設と同時に，「共立薬科大学図書館」から「慶應義塾大学薬学メディアセンター」と名称を変え，学内の６番目のメディアセンターとして活動を開始した約10年が経過した節目に今日までを振り返り，今後の展望について述べたい。

1　薬学部の10年

共立薬科大学が慶應義塾大学と合併した2008年，薬学教育は大きな変化の中にあった。校教育法の改正により2006年から薬剤師養成のための薬学教育は４年制から６年制に変更され，薬剤師として求められる資質は大きく変化した。薬学部を有する大学では薬学教育モデル・コアカリキュラムを基本としながら，各大学の特性を生かした教育へと転換が始められていた。

薬学部では上述の合併により，慶應義塾の一学部として「日本の薬学をリードする」を旗印に，以前にも増して研究に力点を置く形で様々な改革が進められることとなった。

まずは４年制の薬科学科，大学院の定員を増やし，研究に専念する学生の割合を増やした。その後，2014年には薬学研究の柱となる創薬研究センターが設立されたほか，医学部や理工学部との共同研究が活発に行われるようになった。一方，薬剤師養成については，２年間長くなった教育期間を通じて質の高い医療人を育てることを目指し，１年次の日吉キャンパスにおける教養教育，５年次の薬局・慶應義塾大学病院等での実務実習など，恵まれた教育が提供される環境が整っていった。

2　薬学メディアセンターの運営

薬学教育を取り巻く大きな変化の中で大学が合併したことを踏まえながら，薬学メディアセンターの10年間について，施設，蔵書，サービスに分けて以下に記す。

(1) 施設

薬学メディアセンターは，芝共立キャンパスの中央とも言える３号館３階に位置している。都心の手狭なキャンパスにおいて図書館が学生にとって貴重な学習スペースであることは，３号館の建設以来20年変わっていない。

６年制への移行により学生数が増えたことに加え，カリキュラム変更や４学期制導入により試験回数が増加し，学生たちは一年中試験準備に追われているように見受けられる。これらの変化を受け，学習スペースを確保する目的で，2010年と2012年の二度にわたりレイアウト変更を行った。その結果，閲覧席は114席から147席に増加した。

一方，図書館の施設としては縮小となる変更も行われた。2009年には，２つあったグループ学習室の１つを芝共立インフォメーションテクノロジーセンター管轄のPCエリアとして提供した。2015年には同じく３号館の１フロア上にある４階集密書庫の洋雑誌を山中資料センターへ移動し，書庫面積を500㎡から167㎡へと大幅に縮小した。その跡地はメディアセンターの管轄を離れて，大学院生の研究交流オフィスとして活用されている。図書館だけを見れば残念な気持ちもあるが，広い意味で学習，研究環境の改善に一役買うことができたと考えられる。

このような経緯で徐々に書庫スペースが縮小し，メディアセンターが専ら勉強のための自習室となってしまうことを防ぐため，最近行ったレイアウト変更では，入口付近の書架をゆったりとした棚に入れ替えた（図１）。新着図書や雑誌の表紙を通路に並べるほか，月に１回のペースで蔵書にポップをつけたテーマ展示を行い，勉強の合間の息抜きの場を提供することとした。

図１　レイアウト変更後の入口付近

(2) 蔵書

合併当時の蔵書冊数は約７万冊であったが，現在は約５万５千冊に減少している。前述の書庫縮小の際に，山中資料センターに約９千冊の洋雑誌を送ったことに加え，学内他キャンパスのメディアセンターとの重複除籍を行った結果である。

薬学という分野は，化学，生物学，医学，倫理学，市場経済学にまで関わる応用科学である。2008年までは薬学を中心に，周辺領域から教養書まで広範囲に渡る資料を備える単科大学図書館ならではの蔵書構成であったが，総合大学の１学部の図書館となったことにより，薬学に特化した蔵書構築が可能となったことは大きなメリットであった。周辺領域は頻繁に利用される資料だけに止め，他館からの取寄せに委ねることとした。日々の学内ILL（図書館間貸出）は冊数こそ少ないながら，信濃町メディアセンター，理工学メディアセンター，看護医療学図書室からはそれぞれの専門書が，日吉メディアセンター，湘南藤沢メディアセンター，三田メディアセンターからは幅広い分野の資料が到着する。

2016年には近年の図書選定と除籍の実績を明文化し，新たな選書方針としてまとめた。さらに最近は，学生の息抜きに気軽に読めるよう，文庫版の小説や新書版の歴史書や経済書，医療系のコミックなどの購入も進め，ブラウジングコーナーの活性化を図っている。

もう一つの蔵書の柱である電子リソースについては，合併当時の電子ジャーナル数は約４万タイトルであったが，現在は約14万タイトルに増加している。データベース，電子ブックも含めた潤沢な電子リソースが研究活動に大いに役立っていることは間違いない。この数年，電子ジャーナルの購入希望が寄せられることはほとんどなく，新任教員からは「慶應に来たら，どのタイトルも読めて助かります。」との声をいただいている。

(3) サービス

合併当初は，慶應義塾大学の図書館システムでサービスを行うことが最優先課題であった。所蔵データの統合を確実に進めると同時に，運用の調整も行った。延滞金のルールを新たに導入し，貸出は３冊から７冊へ，７日から14日へと変更した。その後は閉館時刻を20時から21時へ延長，試験期間中の開館等のサービスが着々と整備されてきた。

目下課題と感じていることは，芝共立キャンパスにおける電子リソースの利用指導に，薬学メディアセンターが関与していない点である。薬学部では「医薬品情報学」や「実務実習事前学習」の授業内で教員が指導する体制となっている。６年制になったことで５年生は実務実習，６年生は卒業研究に時間を費やすことになり，従来よりデータベースや電子ジャーナルを利用する機会が増え，信濃町メディアセンターのセミナーに参加を促す教員もいると聞く。薬学メディアセンターでできることは何か検討し，支援体制を作りたい。

上記の例も含め，今後のサービスを考えるうえで，利用者の意見を聞くことは欠かせない。薬学メディアセンターはこの点において，大変恵まれている。教員との間は，薬学メディアセンター協議会，学生とは学生図書委員会がそれぞれ年に２回開催されるので，図書館スタッフが出席して直接説明したり意見を聞いたりできる。また，事務室とカウンターが一体となっているため利用者と顔馴染みになりやすく，常日頃から気軽に話ができる（図２）。小規模ならではの環境を大切にサービスに活かしていきたい。

図２　事務室から閲覧室を見渡す

3　次の10年へ向けて

2018年に迎えた薬学部開設10周年では，６月に記念式典が行われ，様々な方の祝辞をいただいた（図３）。薬学メディアセンターも，館内でささやかな記念展示を行った（図４）。さらに12月には，多くの教員によりこの10年の記録とこれからの展望が綴られた記念誌[1)]が刊行された。これらの行事は教職員が一体となって実施されるため，私たち図書館スタッフにとっても学部の方向性を共有できるよい機会となった。

図３　薬学部開設10周年記念式典

図４　10周年記念展示

こうして振り返ってみると，薬学メディアセンターの10年は，薬剤師養成のための薬学教育６年制への移行と，大学合併により薬学部が慶應義塾の一学部となったこと，この２つの大きな変化とともに歩んできたと言える。

薬学部の成長を実感しつつ，私たちも共に薬学部の向かう先を見つめ，そして６つのメディアセンターの一員として次のステージに向かっていきたい。

注・参考文献

1）慶應義塾大学薬学部．慶應義塾大学薬学部開設10周年記念誌2008-2018年．東京．慶應義塾大学薬学部．2018．61p.

2）慶應義塾．薬学の未来を拓く．東京．慶應義塾．2008．210p.

3）関口素子．薬学メディアセンター（芝共立薬学図書館）―振り返り，先に進む―．MediaNet．2009．no.16．p.37-39.

4）関口素子．望まれる形の図書館に―薬学メディアセンターレイアウト変更工事―．MediaNet．2010．no.17．p.74.